武蔵野日曜聖書講筵

獅子と狼と豹
――エレミヤ記第5章4～9節――

１９７４年３月17日
小池辰雄

宗教的な姦淫　ダンテの『神曲』地獄篇　豹と獅子と狼　邪恋　傲慢、嫉妬、貪婪　獅子―傲慢―意志　自我という欲心　神霊の止どまっている霊止　情的な罪から意志的な罪へ　妬み争い貪り　無私は十字架が賜る　我を受けよ！

【エレミヤ5】

4故に我いいけるは 此輩は惟いやしき愚なる者なれば エホバの途と其神の鞫を知らざるなり 5われ貴人にゆきて 之に語らん かれらはエホバの途とその神の鞫を知るなり 然に彼らも皆軛を折り縛を断てり 6故に林よりいづる獅子は彼らを殺し アラバの狼はかれらを滅ぼし 豹はその邑をねらう 此処よりいづる者は皆裂かるべし そは其罪おおく その背違はなはだしければなり 7我なに故に汝をゆるすべきや 汝の諸子われを棄て 神にあらざる神を指して誓う 我すでに彼らを誓わせたれど 彼ら姦淫して娼妓の家に群れ集まる 8彼らは肥たる牡馬のごとくに行きめぐり おのおの嘶きて 隣の妻を慕う 9エホバいいたもう 我これらの事のために彼らを罰せざらんや 我心はかくの如き民に仇を復さざらんや

●宗教的な姦淫

今日はエレミヤの5章の6節から9節まで。切れ目からいうと、4節からなんです。

4故に我いいけるは 此輩は惟いやしき愚なる者なれば エホバの途と其神の鞫を知らざるなり 5われ貴人にゆきて 之に語らん かれらはエホバの途とその神の鞫を知るなり 然に彼らも皆軛を折り縛を断てり

前に「いやしき者」というのがあるので、ここでは「貴人」という。庶民も上層階級の人もみなダメだということです。

6故に林よりいづる獅子は彼らを殺し アラバの狼はかれらを滅ぼし 豹はその邑をねらう 此処よりいづる者は皆裂かるべし そは其罪おおく その背違はなはだしければなり

7我なに故に汝をゆるすべきや 汝の諸子われを棄て 神にあらざる神を指し

て誓う 我すでに彼らを誓わせたれど 彼ら姦淫して娼妓の家に群れ集まる 8彼らは肥たる牡馬のごとくに行きめぐり おのおの嘶きて 隣の妻を慕う 9エホバいいたもう 我これらの事のために彼らを罰せざらんや 我心はかくの如き民に仇を復さざらんや

「故に」というのは何かというと、５章の始めの方にもありましたように、

「1汝等エルサレムの邑を走り回り、しかしてその広場にて見、知りかつ尋ねよ。汝等もし一人の公義を行い真理を求むる者に逢わばわれ（エホバ）之（エルサレム）を赦すべし」（エレミヤ５・１）

という著しい言葉があった。そして、

「3エホバよ汝の目は真実を顧みるにあらずや」

真理と真実のことは、こないだお話したとおりです。

「そういう人が一人もいない」

というわけで、この「故に」というのが非常に強いわけです。

「卑しき人たちも或いはいわゆる貴人といわれる人たちもみな神に背いて、どうも救いようがない」

と。「そういうわけであるから」というこの６節の「故に」は非常に強い「故に」です。「アルケーン」というヘブライ語でも非常に強い言い方をしてある。

6故に林よりいづる獅子は彼らを殺し アラバの狼はかれらを滅ぼし 豹はその邑をねらう

「アラバ」というのは「アラバの荒野」という有名な荒野がある。「獅子と狼と豹」という題を出したが、要するにこれらのものが神さまの手先となって、イスラエルを審くところの、特にスクテア人――またやがてはバビロンがそうですが――そういった外敵のことを指しているわけです。

だから、エルサレムの町々から出ると、みんなそこで噛み殺されてしまう、要するに罪の審きを受けるという。そして、

「そのもとは神を棄てた、その信仰的な宗教的な姦淫」

イスラエルの民はそれを問われている。それを具体的な詩的な表現で８節あたりに書いてあります。それは信仰的な、また社会的なそういった秩序と両方乱れているから、８節のような言い方がしてあるわけです。まぁそれだけの話です。

●ダンテの『神曲』地獄篇

それで今日は、この

「獅子と狼と豹」

とこの三つの動物がいったい何を表しているかということを非常によくつかまえて、詩の

上に表しているのが
　ダンテ〔ダンテ・アリギエーリ　Dante Alighieri　1265～1321/9/14〕
なんです。そこでダンテの『神曲』の地獄篇第１曲を少し読みながらお話をします。

「人生の旅路なかばに
正しき道をうしない、わが身の
暗き林のうちにいるのを見た。」（地獄篇第１曲１～３行）

　これはダンテ、自分のことですね。「人生の旅路なかば」というのは詩篇の90篇に出てくるところの、

「人間の生涯は七十歳か八十歳である」（詩篇90・10）

〔10われらが年をふる日は七十歳にすぎず あるいは壮やかにして八十歳にいたらん されどその誇るところはただ勤労とかなしみとのみ その去りゆくこと速かにしてわれらもまた飛去れり〕

という言葉がある。あの「七十歳」から来て、「人生の旅路なかば」は35歳のことをいうわけです。こういうことは、聖書を読んでいない文学者がみな知らない。

「ヨーロッパで、人生の旅路なかばというのは何だ？」

ということで、私が東大にいたときに、私に質問したから、私はすぐ言ってやったら、

「小池さんは生き字引みたいだ」

なんて言いましたけれども。結局、ヨーロッパのものを読むのに、聖書を読んでなければ――そういうのを自由に彼らは使っているわけですから――今の大学の先生方も、まぁ信仰はともかくも、大学に限らず先生方はこの聖書や東洋の仏典を――何といってもキリスト教と仏教は世界の精神史の根底を流れているものですから――これ抜きにして思想の何のかんのと言ったって、これはダメなんです。

　ニーチェ〔フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844/10/15～1900/8/25〕

を研究するにしたって、ニーチェは聖書のアンチテーゼ〔対立命題〕としていろんなことを言っているだけですから。それで、

「自分は35歳のときにまだ迷っていた」

と、ダンテは言っている。ダンテの誕生日が１２６５年ですから、これは１３００年頃になるわけです。書き出しはそうなっていて、そして、自分は山に登ろうとした。

「太陽が照っている山に登ろうとしたところが、その道をふさぐものがあった」

というようなことが書いてある。

「一の小山の麓にいたって
仰ぎのぞみ、既にその肩の
人をいかなる径にも正しく導く

遊星の光線を纏いおるを見た。」（地獄篇第1曲15～18行）

「遊星」というのは太陽のことです。即ち、太陽の照っている山に登るということは、理想を目指して自分は進んで行くということ。ところが、その道を塞ぐものがあった。ダンテは一番先に――聖書では「獅子と狼と豹」の順ですけれども――豹のことが先に書いてある。これは中山昌樹さんの訳です。口語訳で分かりやすいですから。

●豹と獅子と狼

「すると見よ、崖の始まろうとする処に
斑紋な皮に蔽われた一疋の
軽くしていと迅き牝豹がいた。
かれわが顔のまえより去らず
却ってわが路を遮ったので
幾度も身を回して私は帰ろうとした。
時は朝のはじめであり
太陽はまだ諸の星、即ち神の愛に
初めて動かされたとき共にいたところの
美しきものらを伴うて登っていた。」（地獄篇第1曲31～40行）

「諸の星」というのは白羊宮のいろいろな星のことで、3月の下旬から4月の下旬にかけて太陽は黄道圏でその線上ある。太陽の十二黄道というのはそのことです。これは天地創造の春というわけで、キリストが磔刑されたのもその頃です。

「神の愛に初めて動かされたとき」

という非常に著しい言葉が出ている。

神の愛、聖霊の愛ということを言いましたが、

"Amor est proprium nomen Spiritus sancti."

「愛は聖霊の原始の名前――あるいは根底の名前、根源の名前――である」

これはトマス・アクイナス（Thomas Aquinas 1225～1274/3/7）の有名な言葉です。その聖霊の愛、神の愛によって動いている。

「宇宙はこの愛によって動いている」

〔註：「しかし既にわが願望と意志とは宛ら等しく廻る輪のごとく太陽と諸の星を動かす愛に廻っていた」（天国篇33曲143～145行）

ということは、ダンテの『神曲』の一番最後の句にそれがやっぱり出ている。

なぜ私が今、特にそう言っているかというと、今ここに「牝豹」というのが出てきた。これはダンテは肉欲の象徴としてここに――豹の姿がちょっと誘惑的なものですから――そう書いているわけです。それで、

「そこで時の刻と快き季節とが

この華やかな皮の獣にむかい
よき望(のぞみ)を私に起こさせはしたが
ということは、豹に打ち勝とうという望みを起こさせようとしたけれども、
現れいでし一疋の獅子の姿にむかい
私を恐れざらしむるには足らなかった。

今度は獅子が出てきた。獅子は傲慢の象徴です。ドイツ語でいうと、「ホッホムート」(Hochmut) というやつです。

彼は頭を高くして飢えかつえ
私にむかい来るもののごとく
空気もこれを怖(おそ)るよと見えた。

即ち獅子の傲然たる姿は大気もこれを恐れる、ふるえているように見えたという。

またその羸痩(るいそう)に一切の欲を
荷なうよと見えた一疋の牝狼が現われた。

これは貪婪(どんらん)の象徴です。貪(むさぼ)り。獅子は傲慢。傲慢(ごうまん)でも驕慢(きょうまん)でも高慢でもいいですが、この三つの動物をもって象徴される事態が、自分の路をたちふさいだというわけです。

かれは既に多くの民の生涯を惨(いた)ましきものにした。
その姿よりいでし恐れにより
かれはいたく圧したので
高きにいたる望を私は失うた。
欣然(きんぜん)として獲るも時いたって
これを失い、思をつくして
泣き悲しむ人がある。
平和なき獣は私をかくならしめ
私にむかい来て徐(おもむろ)に私を
太陽の黙するところへ押しかえした。

太陽が沈んで光がなくなることを「黙す」という。視覚と聴覚を混ぜたような言い方をする。ダンテは時々そんなようなことをやる。やっぱり詩人ですからね、「光が黙す」というような言い方をする。それでもう仕方がないから、

低き処へと私が落下していた間(ま)に」（地獄篇第１曲41～61行）

云々といって、そうすると、ある影が現れた。

「影か真の人間か、いずれにもあれ
汝私を憐め」と私は彼に叫んだ。」（地獄篇第１曲65～66行）

といって、救いを求めた。その影が即ち

バージル、ヴェルギリウス〔プーブリウス・ウェルギリウス・マロー Publius Vergilius

Maro 紀元前 70/10/15？～19/9/21〕
ラテン詩人ですね。ダンテの詩人としての先輩。このバージルの案内でもって地獄と煉獄の遍歴をやっていって、それから天国は
ベアトリーチェ〔1265～1290〕
に案内されて行くわけです。そういう構造になっている。要するに、この豹と獅子と狼で路をふさがれてどうにもならんということです。

モーセの十誡に、

「汝殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽りの証（あかし）を立つるなかれ、隣りを貪（むさぼ）るなかれ」

とある。あの五つの欲、悪いもの。

「殺人、姦淫、強盗、虚言偽証それから貪婪（どんらん）」

と。民法と刑法のいろんなケースは結局、煮つめればその五つではないですか。だから、モーセの十誡というのは素晴らしいところを突いているわけです。モーセの十誡をもうひとつ根底からそれを語っているのがキリストの山上の垂訓です。

「兄弟を憎んだ者は殺したと同じことだ。色情をいだく者は姦淫したと同じことだ。欲しがることは盗んだと同じことだ」

というようなわけで、キリストは心情の一番奥を突いて言ったから、十誡よりか厳しい。また十誡の根本精神である。だから、山上の垂訓に誰か堪え得んやというわけで、みんな落第です。

●邪恋

ダンテが、姦淫といいますか、邪しまな恋、邪恋といいますか、そのことを非常に詩的に素晴らしく書いてあるのが第5曲です。地獄の第二環になるんですが、フランチェスカとパウロの哀しき恋物語。これが地獄の第5曲にありますから、読んでみてください。

地獄の圏に亡霊たちがやってくると、ミノスというのが大きな長い尾でもってその人をグルグル巻いて、その巻き方が5回巻けばどこへ行く、6回巻けばどこへ行く、とちゃんと地獄の場所を示されるなんてことが書いてある。描写は非常に詩的にはうまくできていますが、それを一々ご紹介はしませんけれども。

「かかる苛責（かしゃく）に罰せられおるは
　理性を本能に従わす
　肉欲の罪人（つみびと）であることを私は悟った。」（地獄篇第５曲37～39行）

その理性が肉欲に負けているような連中であるのを、自分を知ったというのがこの5曲のところに書いてある。風が吹いて、ちょうど鳥が舞うようにグルグル旋回して、そのご連中が空中を舞っているというような言い方をしている。そこで出てくる人物を少し言う

と、大体一番先くらいに出てきているのがクレオパトラ。これはジュリアス・シーザー〔紀元前100～44〕と関係して子供ができた。アントニウスがそのあとでクレオパトラの情人になったわけですが。それでオクタビアヌスのために追われて、このクレオパトラとアントニウスは自殺してしまう。それから、有名なトロイア戦争に出てくるところの、ヘレナとパリデ。スパルタの王メネラオの妻ヘレナがパリデに誘拐されて、トロイアに行った。それから戦争が始まる。『イリアス』・『オデュッセイア』の一番先に書いてある。それから、

「尚お恋がこの世より去らした千余の影を
彼は私に示し、指さして名をあげた。
わが師が古え(いにし)の貴女達や騎士達を
名ざすのを聞いた時
憐憫(あわれみ)が私に起り、殆(ほと)んど私は昏迷(こんめい)した。」（地獄篇第５曲68～72行）

なんて書いてある。ある意味において気の毒に思ったというわけです。ダンテの詩的な表現は、例えば「リーベ」（Liebe 恋）という字を一行で３回も使うような使い方をしている。

「恋人を恋さしめでは措かぬ恋が
彼慕わしさにいと強く妾(わらわ)をとらえ
遂に汝の見るごとく今尚妾を棄てない。

これはフランチェスカが語っている言葉です。

恋が我等を一の死に導いた。
我等の命を断ったものをカイノが待つ。」（地獄篇第５曲103～107行）

カインのことです。カインのような兄弟、即ちパウロの兄弟がこの二人を殺すわけです。

「憐憫(あわれみ)の余り死せんとする人のように気を失い
屍体の倒れるように私は倒れた。」（地獄篇第５曲141～142行）

と、この第５曲の一番あとに書いてある。ダンテは愛のことについては非常に深い関心を持っていたものですから、それが邪(よこしま)であったために彼らは気の毒であったけれども、「自分も耐えられない」といってそこに倒れてしまったというわけです。

●傲慢、嫉妬、貪婪

それから、貪婪の方は第６曲に表れています。いろいろ白党、黒党のことが出てますが。狼の方は、74行のところに、

「傲慢、嫉妬、貪婪は
心を燃やした三つの火花である。」（地獄篇第６曲74～75行）

なんて書いてある。傲慢は――肉欲は恋愛からきているわけですが――そいつが間違うと嫉妬となる。妬みの感情です。

人間の心理の分析でもないけれども、知情意で、傲慢は意志的な罪なんです。知は貪婪、

欲望。それから、情は恋愛から肉欲にだんだん変わっていく。人間の心の働きの三つは、カント［イマヌエル・カント（Immanuel Kant 1724～1804）プロイセン（ドイツ）の哲学者］の有名な三批判――実践理性と純粋理性と判断力の批判――情は美の世界、知は真、意は善。真・善・美というわけだ。

傲慢の方の首魁はサタン。他にもちょこちょこ出てきますけれども地獄篇の第31曲に、

「けだし心の固がもし悪意と
力とに結ばる時は
何人もこれを防ぎ得ない。」（地獄篇第31曲55～57行）

なんていう言葉もこれとちょっと相関連した言葉です。とにかく、神の意志に背くというやつが一番悪いやつです。地獄の34曲に、

「憂愁の王国の皇帝が
胸の半まで氷の外に出ていた。
氷漬けになっていて、胸の上は氷の上に出ていたという。
巨人をその腕に比べるよりは
寧ろ私を巨人に比ぶべきである。

なんてことはちょっと読んでわからないでしょ。巨人がいるけれども、それはこの王者即ちサタンの腕に比べると、巨人もサタンには及ばぬことが非常に遠いので、サタンというやつは特別にでっかい悪者だと。むしろ、巨人と私を比べた方が、その巨人と私の差の方が小さい。それくらいに巨人とサタンの隔たりが大きい。サタンがどれほど悪いやつだかということをこういう表現で言っている。ダンテの表現はなかなか難しいですからね。

その一部が斯くの如しとすれば、これに
添う全体のいかに大なるべきかを今思え。
今醜きがごとく嘗ては彼は美しく
然も己が造主に向かい眉を上げたとせば
一切の悲愁の彼より出でしも宜なるかな。」（地獄篇第34曲28～36行）

「造主に向かって眉を上げる」というのは、反抗することをいう。滅びと悲しみと憂いの国として地獄をとっているわけですから、そこでそういう言葉が出てくるわけです。

これは今度は神さまの方からいうと、全能・全知・全愛ということになる。その三位一体の神に向かって背いたやつは、このサタンは傲慢にして暴力なんだ。殺人の罪だ。これは暴力罪、殺人、殺し屋だ。それから、悪巧み。

「蛇の如く聡く」

というやつがこれだ。サタンはこの悪巧み。それから奸智。今度はサタン的になると、こいつが憎悪になる。憎しみに。妬みや憎しみになる。憎悪、嫉妬。感情の類型からいうと、

そういうことになる。

●獅子――傲慢――意志

今度は、地獄に限らず煉獄にも出てくるわけです。獅子は、煉獄篇の11曲と12曲に出てくる。著しい句をちょっと読んでおくと、11曲の73行から。ある傲慢の霊が語っていたのを聞いて、ダンテが何と言っているかというと、

「聞きつつ私は顔を下に垂れた。すると、
語った者でなくそのうちの一人が
己を押さえる重荷の下にひしがれた。
かくて私を見、私を知って呼び、
即ち自分が誰かということを分かって、これはある画家なんです。
彼らと共に全くかがまりゆく私に
自分が本当に低くかがまって、
かろうじて目をかたくすえた。」（煉獄篇第11曲73～78行）

なんて書いてある。ということは、ダンテ自身が彼の中に傲慢の霊があるんです。それにとがめられるものだから、自分もそこを通る時はうんと身を低くして通ったという。というのは、傲慢なやつは大きな重い石を背負わされて、身をかがめる。そうやってその山を登って行く。それで身体が折れそうになる。即ち、けしからんというわけで、

「低姿勢になれ」

という。ちゃんとダンテは言っているんだ、低姿勢のことは。彼自身もそこを通る時は自然に身が低くなった。というのは、自分もとかく高慢なところがあるから。

あれがそうだよな、キリストの偉大な弟子パウロが。パウロもとかく誇りたがる。

「己が義につきては責むべきところなし」

なんていって誇っているんだからね。そして、キリストの弟子を迫害していた。だから、

「なんぞ、我を迫害するか！」

と復活のキリストが言われたのは、パウロのあの傲慢な自己義認、これをパウロがやっつけられた。そしてキリストにぶっ倒されたわけです。そのようにダンテも傲慢。意志的な人間がややもすると非常に傲慢になる。これは心理的につながっているわけです。

「人間の人格の中心は意志である」

とカントは言った。

「その意志はどこまでも「善意志」「グーテルヴィレ」（guter Wille）でなくてはいかん」

ということを言った。しかし、その意志が自己中心になると、いわゆる我意になりますから。それが傲慢です。

「わが意（こころ）にあらず、汝の御意（みこころ）を成させたまえ」

と、キリスト自身がいつも平伏（ひれふ）している。

大体、世の中で仕事をするやつはこっち〔意志〕の人間が多いんだ。こっちの人間が多いんだが、そいつがいろんな悪いことをする。神さまを信じない限り。そして世の中の権勢をにぎってしまう。権力者、政治家というのはこっちが多い。もちろん人間はどれっきりということはないですよ。この三要素はみな備えているけれども、特にこいつが強い。サタンがそうなんだ。サタンがこっちの方の親玉なんだから。

「憂愁の国の帝王」

なんだ。

「我も神の如く」

と言ったのは、これはルチフェロという天使、首座天使ですよ、一番素晴らしい天使が神さまの位置を僭称しようとしたから、これが引っくり返された。

●自我という欲心

意志は大事なことなんだが、あの

テニソン〔アルフレッド・テニスン（Alfred Tennyson 1809～1892）ヴィクトリア朝時代のイギリスの詩人〕

の有名な句にあるとおり、

「我々の意志は我々のものではなく、これを汝のものとせんがためにある」

"Our wills are ours, to make them thine."

という。これを完全に実行したのがキリストですよ。

「**わが意志にあらず、汝の意志を成させたまえ**」

"Thy will be done."

という。だから、「我々のもの」といって、神さまを無にして傍若無神になると、これがサタンになる。しかし、

「私の意志ではありません」

といって、自分の意志に死ぬと、今度は本当の神の全能の意志がその人にかかってくるから、キリストは御意を実現した。聖意を体現したわけです。聖なる意志を体現した。

「**御意（みこころ）を成させたまえ**」

といって傍観しているのではない。自分を挺身（ていしん）するわけだ。挺身して自分の意志をすっかり預けてしまう。

ヒルティ〔カール・ヒルティ（Carl Hilty 1833～1909）スイスの下院議員を務め、法学者、哲学者、文筆家〕

の詩の中にもある。

「自分の自由意志に死ぬ時に本当の自由に生きる」

と。自由とか何とかみんなそうです。一遍そいつが死ななくてはいかん。「死ぬ」ということはもうひとつ言い換えると、神さまの中に投げ捨てなくてはいかん。私たちはキリストの中に投げ捨てる。

「キリストの中に自分を、一切を投げ捨てる、もう知も情も意もみんな」

結局はその角度です。自分でどうこう出来やしないんだから。みんなこれをキリストの中にお預けしてしまう。ということは、己自身をお預けする。

結局は、意における、知における、情における我というもの。これは結局、意志的な欲、知的な欲、情的な欲。欲心、これはヤコブ書に出てくる。これは要するに

「自我」

自我という欲のかたまりだ。人間はいろんな欲を持たされているんです、これは神さまが造ったんだから。ある意味において、それぞれの欲があるのは悪くはない。それを私するからいかん。欲を、神さまのいろんな、私たちに与えてくれているところの、知性でも感性でも何でも、それ自体は――肉欲的なものだって、性欲的なものだって、それから食欲だって、知識欲だって、権勢欲だって――それぞれ生まれつき戴いているものだ。

「それをいかに使うか、どの角度でいくか」

というところに問題がある。いかに使うか、どの角度でいくかということ、それの一番中心は、自我というやつは、即ちその魂だ、要するに。魂、あるいは心といってもいい。人間の中心の霊。その一番中心は霊だよ。この霊が、

「神霊に属するか、サタン霊に属するか」

で決まるわけだ、この使い方が全部。いわゆる「自己中心」にしているのはみんなサタンについている。傍ら神無きがごとし、傍若無神というやつだ。

●神霊の止どまっている霊止

私は昨日、中学の卒業謝恩会があって出掛けて行った。校長さんだから仕方がない。あとは担任の先生たち。それで一席やってくれというから、

「これから高等学校へ皆さんは上がるんだけれども、高等学校時代というのは非常に精神的に動揺する。一番大事なことは、神仏に対する畏敬の念です。これはお母さんたちがその角度でもって家で教育していただかなければ、私のそれと一緒になってくださらなければダメですよ」

というわけで、はっきり言いました。もうシーンとして聞いていてくれた。それから、私は少し宗教的な体験までついでにしゃべってしまった。

要するに、「霊止（ひと）」、神霊の止どまっているものを

「霊止（ひと）」

という。今の人間はみな神霊が止どまっていない人間ばっかりだ。クリスチャンなんてい

ったって、聖霊が来てなければダメだ。この神の霊がそのひとに内住し留まる。そういうのが本来の霊止である。そこに帰らなくてはいかん。帰ることが本当の前進です。

この魂、心が神につくか。私たちにとってはキリストにつくか。我々の魂、心が歪んでしまって、方向が変質し変向してしまっているものを、もうひとつ質を変え、向きを変えることをする土台は、何といっても十字架です。キリストの十字架がそれをしてくださった。既に救いは、贖いは完了している。

「自分で自我をどうしようとしたってどうにもならんよ。私がそいつは全部ここ（十字架）で片づけてしまったではないか。あとは『はい！』と言って受けとるだけだ。『然り！』と言って受けとるだけだ」

と。「信ずる」とは、キリストの十字架の事実に対して「然り」と言うこと。この「然り」はもちろん平伏して言わなくては。

「参りました！」〔降参しました！〕

と、そのキリストの贖いの大愛に「参りました！」という。そこには聖霊が臨んでくる。これをはっきり受けとらなければ、聖霊は臨んでこない。御霊の霊止に、新しく霊止になるわけです。新人となる。パウロが言っている

「うちなる人、新しき人」

ということ。要するに、それ自体はみな賜りたるものであって、決して悪くはない。

「それをどう使うか、どのように変質していくか」

というところに問題があるわけです。

●情的な罪から意志的な罪へ

そういうわけで、今のダンテは高慢のところで、煉獄篇の第11曲に、

「自分も心を低くして、姿勢を低くして過ぎて行った」

なんてことを書いてあるから、面白いからご参考に言ったわけです。それから12曲もそのことが書いてありますが、まぁいいでしょう。

それから、「豹」の方です。罪からいうと、やはり意志的な罪が一番重い。それから、悪巧みや欲の方。感情的な、情的なものはむしろ質からいえば軽い。というのは、ダンテは地獄の先の方へ段々、情的な罪から意志的な罪へと、地獄を下りていくときには、奥へ行くほど意志的な罪になる。「忘恩罪」なんていうのも随分下の方にある。

このごろ忘恩的な、先生を先生とも思わないようなのが多い。その点、私立は割合人間味があるね。公立というのは何かわけがわからない。

そこでダンテは、その罪を清められるために、面白いことが書いてある。

「やがて彼は私に先立って火中に投じ、

というのは案内者がね。

常に長い路、我らの間をわけていたスタッチオに
後ろより来るように乞うた。
私が中に入るや、灼熱はそこにはかるべくもなく、
わしは煮えたる硝子の中になりとも
身を投じて冷やそうとしたが」（煉獄篇27曲46～51行）

煮えたガラスなんてこれは大変なものです。そこへ投じて冷やそうとしたという。自分を今焼こうとする熱は溶けたガラスの熱よりはるかに高いから、

「せめてもガラスの熱の中に入って冷やそうとした」

なんて、そういう表現をするんです、彼は。

そういったようなことで、とにかくここでもって清められて、そして最後にいよいよ天界へのぼっていく準備はできるわけです。

私は曠愛新書第2号の「霊的神学的信仰告白」の「天路」というところに書きましたね。今ここで一々読みませんけれども、また読んでみてください。ダンテやカントのことを引用して書いてある。第2号の64頁からずっと。

〔註：曠愛新書 第2号『桑の木によぢのぼる』（１９６４年暮刊）／「霊的神学的信仰告白」第一の「天路」の原型は、１９３７年10月1日、信仰の恩師藤井武先生の第七周年記念講演会で「別の路」と題して語ったもの。「小池辰雄著作集 第三巻『無の神學』／第二部　無の神学への道／第二章　天路」に掲載〕

まぁ大体、『神曲』で引用するようなところはそれくらいだったと思いますが。ひとつ言い忘れたのがあったな。欲を制する姿で、自分の腰に縄でもって縛っていたということが、地獄の16曲に出ています。しかし、

「その縄は要らなくなったので谷に投げ捨てた」（地獄篇第16曲106～114行）

なんて書いてある。

●妬み争い貪り

ところで、高慢のことについて、聖書の箴言の16章18節に、

「**驕傲（たかぶり）は滅亡（ほろび）にさきだち誇る心は傾跌（たおれ）にさきだつ**」（**箴言16・18**）

とある。著しい言葉です。

「生者必滅（しょうじゃひつめつ）、会者定離（えしゃじょうり）」

〔生ある者は必ず死に、出会った者は必ず別れるのがこの世の定めであるという仏教の教え〕

なんていう。

「**驕傲（たかぶり）は滅亡（ほろび）にさきだつ**」

すべて神に背いた高慢という事態がみな滅亡に先立つ。人類も、今20世紀の人間も、この

ようにいわゆる

「科学、科学」

といって、科学を悪巧みで使いだしたら、科学的な知が悪巧みと一緒になって貪欲が――国際的にいろんなことをやっているけれども――最後には爆発したら、これは滅びに先立つ。そしてこの高慢の意志と両方一緒になっている。それから、肉情的な方面も非常な乱れがきている。ですから、20世紀の様相は非常に危ない。これが即ち、

「高慢は滅亡に先立ち、驕る心は倒れに先立つ」

という。それから、箴言の8章の13節に、

「エホバを畏るるとは悪を憎むことなり　我は傲慢と驕奢　悪道と虚偽の口とを憎む」（箴言8・13）

なんていう言葉もあります。

それで、すべて自己中心の欲の世界を語っているのが、あのヤコブ書の4章です。

「1汝等のうちの戦争は何処よりか、分争は何処よりか、汝らの肢体のうちに戦う慾より来るにあらずや。2汝ら貪れども得ず、殺すことをなし、妬むことを為れども得ること能わず、汝らは争いまた戦す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。3汝ら求めてなお受けざるは慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。4姦淫をおこなう者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。5聖書に『神は我らの裏に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか。」（ヤコブ４・１～５）

「神は我らの裏に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう」

という言葉は旧約聖書にそのままはない。そのままはないけれども、非常に著しい言葉です。旧約にヤーヴェーの神さまは、

「妬みの神」

と書いてある。「妬む」という言葉はいやな言葉です。日本語の訳がどうかと思いますけれども。「妬みの神」というのは要するに、せっかく造った人間の魂、霊をサタンの虜にされてはやりきれないといって、

「神さまはサタンに対して妬みを起こす」

という、そういう言い方をしている。ということは、神さまは我々の魂を熱愛しておられるということを、対サタンの関係で「妬み」という言葉を使っているわけです。そこは間違えないように。いわゆる人間的な妬みという気持とは言葉の使い方が違いますから。

もちろん妬みという感情はよくない。「妬み争い」が一切のもとだよな。女性は妬みが多いし、男性は争いが多い。情の世界の狂いと、意志的な世界の狂いです。妬みは女性、争いは男性。これが悪く狂うとみんなそういうことになる。それがこのヤコブ書です。要す

るに、高慢、妬み、争いは、即ち傲慢から争いが来て、欲情から妬みがやってくるし、それから貪婪は貪りですが、「妬み争い貪り」というようなことになる。

●無私は十字架が賜る

「貪り（むさぼ）」の世界ももちろん、心の衝動は大事なんです。何となれば、真理を追求することにおいて真理を求めることは――「貪り」という言葉はわるいけれども――追求してやまないというやつはここから来るわけです。これはパウロがピリピ書で言っているとおり、

「追い求めてやまない」

という。その目的に向かって勇猛邁進するわけです。それは真理追求です。

なぜ、そういうものが正しくいくかというと、この一番中心が

「無の世界」

に入らなくてはいかん。無私、私が無いこと。無私は十字架が賜る。

「十字架によって自我がすっ飛ばされている世界」

が無私の世界です。もう非常に楽になる。この楽になった世界に力がくるわけです。これは、

「聖霊の力」

です。この十字架によって無私にされ、私無き事態が一番根底にできているから、そこに御霊が臨んでくる。そうすると、御霊を追求する、真理を追求する。

「我は真理（まこと）なり、生命（いのち）なり、道なり」

というキリスト自身を追求してやまないのは、この無私を賜って聖霊がくると、その追求が、貪婪（どんらん）が真理追求となる。道を追求することになる。また、本当の生命を追求することになる。情愛の世界が本当に神の愛を受けとり、これを追求する、これをいよいよ深く受けとる世界、体受する世界になる。

だから、ものはただ分析したってダメですよ。

「どういう関連において、どういうように引っくり返っていくか、どういうように変質していくか」

というところを見ていく。人間というものは、そんな割り切れる存在ではないんです、現実の人間は。しかし、その割り切れないやつをどのようにして、

「何が中心になって動いていくか」

ということが大事なんです。ただきれいごとに割り切ったってどうにもならんですよ、これは。

キリストの愛を体受していく。キリストは神さまの意志を、

「汝の意志を成させたまえ」

と、ここにも本当に転換がある。それはみんなこの無私の場から始まる。

「わが意志にあらず、汝の意志を。わが智慧にあらず、わが欲にあらず、汝の賜う

ところの豊かなる真理を」

と。そうしたら、創造的な人間になる。

●我を受けよ！

それから、この愛神の愛。十字架に表れ、聖霊に表れているところの愛。だから、この世界は実は愛の力が一番強い。人間は最も深く愛に飢えている。要するに、宗教の最後は愛であり、慈悲であり、仁である。世界の偉大な思想――ただ「思想」とは言えません、もっと深い世界です――これは全部、愛に、結局は神的な、仏さんの慈悲、如来の慈悲、慈悲の劫力という、そういう世界です。

我々の生命とは何ぞや。この愛の生命です。愛とは人を愛すること。愛するとは何か、人を救い上げること、助け上げること。荷いの体勢。敵をも愛することができるんです、この力がくるから。敵をも荷なってしまう。

要するに、この「獅子と狼と豹」が豹変すると、これがみんな豹変しますと、素晴らしいことになる。私は天界の新しい動物をつくろうかと思う、私の詩では。そんなことまで言ってしまうとうまくないけれども、もう私はいろんなことを考えているからね。

そういうような構造になっているんですよ、ちゃんと。だから、どんなものにぶつかっても、全部私たちはこれを変質変貌させて、真理の天国的な、地獄を天国に変えてしまうわけだ。その中心は何といってもキリストにくることです。キリストはそのようにして私たちを改造しようとおもって、上から来ていらっしゃる。

「我を受けよ！」

と。「信ぜよ」というのは「受けよ」ということです。受けないで、ただ

「キリストは十字架で私たちを贖ってくださいました」

という命題を信じて何になるか。全部これは全存在で受けとること、体受することです。今のキリスト教がなぜ力がなくなってしまっているかというと、本当に受けとっていないだから、

「信ずる」

という言葉が非常に躓きになっている。命題を信じたり、信仰箇条を信じたって、そんなものはどうにもならん。

キリストという、もう言葉では限定できないところの驚くべき内容、無限無量なる内容を受けとっていく。獅子も狼も豹も全部これを豹変してしまう。こういうわけです。だから、ダンテの『神曲』なんか読んだって何ということはない。充分にこれを消化してしまうから。「ダンテは難しい」なんて、ちっとも難しくはない。そういうことで、今日はお終いといたします。讃美歌354番「かいぬしわが主よ」を歌います。